

## 古都と北野踊り

——川端康成と水上勉——

山 本 寿 夫

(一)

物語のいではじめの祖なる竹取物語。翁が竹の節に見出すかぐや姫、老翁夫婦掌中の玉といつくしみ、美しき理想の女性、憧れの乙女と五貴公子に求婚され、帝の仰さへ蒙るに至る。しかし総てを拒み遂には老翁の手段を尽した必死の引留めにも不拘昇天、遠き天空の彼方に消え去る。人の心を痛切に魅惑的に引きつけやまぬもの、しかも手も届かぬ、いや一度掌中にし得たと思へ遠く飛去り消えゆくもの、決して手にし得られぬ故にこそ魅惑しやまぬもの、それは高遠なもの、エキゾチックなもの或は遠い昔や未来であつたりする。それを思慕してやまぬ人の心に着目し西下博士は竹取物語について

第一は天上の思慕である。古代の思想では自然も文化も人間も、すべて神であると考え、それで一種の安心があつたが、人間は神ではなく地上の悲しい存在であることに気がつくると急に神や天上を思慕するようになり、その思慕にまかせて天上と地上とが一緒になった夢を抱き然もその夢がさめると天上は天上、地上は地上という悲哀を味わわねばならぬ。この立場からみればこの物語はこの思慕・夢・悲哀を書いたものといえる。

第二は非現実の美である。かぐや姫は美しいけれども、人情の通わぬ冷たさを持つている冷たいけれども美しい。あたかも美保の松原に舞いさがった羽衣のように美しい。この物語はこの美しさを書いてあるといえる。

と説き、この非現実の美しさは竹取物語に色鮮かに現はれ、しばらく沈潜伏流し明治に至り鏡花の「高野聖」に再び地表に現はれくるとい

ふ。成程かぐや姫は清純無垢かがやく美しさは男性思慕の的、その美しさに比し如何に貴公子達の貧弱に描かれることか。老夫婦の愛子、掌中の玉と愛情のかぎりを享け、老夫婦また幸運に恵まれ産をなし栄達さへする。が姫の本質は遠く月世界のもの所詮遠き世界のもの、永遠に思慕するものとし離別の悲哀を嘗むべきものである。手もとにあれど実は遠きもの所詮夢なのである。この点全く「高野聖」の女性も同様で、酷暑の山中苦痛難渋、生死の境を彷徨し、やすらぎの場をもとめてやつと辿り着きえた人跡未踏の山中の一軒屋に邂逅する女性、周囲の妖怪不可思議中に一きは美しく光り輝く。山中余人なく水も滴る妖艶さは眼前咫尺の間にあり文字通り手が届き、その若々しくなまめかしく人なつこい姿態とゆきとどいた親切は男心を魅惑してやまない。だが誤つて手を触れよ直に己の心の醜怪の具象と化すであらう。手を触れんとし、或は一度は触れたか、むささび・猿・蝙蝠と化し夜となく昼となくこの一軒屋の周辺を彷徨するもの如何に多きことか。竹取と逆に美しきものはその位置をかへず、これに近づく者遙かに遠く醜悪な魔界に落下する。一は清純一は妖艶人を魅了するニュアンス異り、一は自ら天上に去り一は近づく者魔界に落下すといふ相異はあるが双方希求は痛切、己の掌中にとみて遠く離れゆくものの、非現実の美しさ、離別の悲しみと共に永遠にこれを思慕するしか仕方のないところ全くかぐや姫も山中の妖女も同一である。竹取も高野聖も非現実の美・夢の美・永遠の思慕と離別の哀しみを書いたものといへる。

さて高野聖の原型は「薬草取り」に既に明瞭に現はれてゐる。瀕死の床の母の平癒を祈る場所を求め誕生日の晴着のまま街に彷彿出た小供が盗賊に誘拐され難渋苦難生死の境を彷徨山中の隠家に監禁されるが、ここに年若く美しき母とも姉ともいふべき女性の愛にめぐり会ひ、彼女の捨身の悲願により薬師岳の赤き花を得て我家に帰る。母は

我子と赤き花を見て驚きと喜びのためか奇蹟的に全快する。その子今や医学生、恋人の不治の病の為に単身薬師岳に赤き花を求め、道を丈なす雑草の中に失ふ、その時花採りの美しき娘現はれ先導してくれ、俱に赤き花を終日お花畑に求めて得ない。夕陽を背にうけ茜色に燃える西空に立つ娘の胸の手に、いや薬師如来の御手に目ざす霊花を見、拝して之を戴けば医学生の手には花は残つて少女は消えあたり一面夕闇。伝へ聞く薬師如来立たせ給ひし所盜賊の頭目かつて己が妻の骸を密かに葬れる所とか。苦難の果に至り得た別天地に此世ならぬ美しき女性にめぐり会うといふ点、その女性はいくまでも非現実の美しさをもち、遠き彼方に去ること高野聖の原型注目すべきである。ここに鏡花自身の母恋しさ見るは誤か。

(二)

ともあれ竹取物語は思慕と夢、夢のさめた哀しみ、非現実の美を描き、その非現実の美は高野聖に再び鮮かに描き出される。この非現実の美「竹取」の美のものは「羽衣」の美といはれる。美保の松原に天降る天女は周知の通り、

古老伝曰 近江国伊香郡与胡郷伊香小江在郷南一也、天之八女俱為白鳥一自天降、浴於江南之南津云々（風土記逸文近江の国の条）

とある余呉湖の白鳥伝説に原型を持つ、いや非現実の美といふより構成そのものが余呉湖の白鳥伝説から美保の松原の羽衣伝説、やがては竹取物語と発展するのである。

さて山中深く清らかに静かに寂しく濃む余呉湖のたたまいとその情趣を、作品の舞台と背景と流れる情調とし、薄倅な男女の悲恋を描くのが水上勉の「湖の琴」である。余呉湖に近い西山部落の百瀬家に若狭の貧しい辺鄙な山村から来た琴糸の糸繰り娘「さく」と若狭の果の漁村に育つ孤児の宇吉が傭はれてきてはのかな愛情が芽生へる。渡岸

寺の観音にもまがひ、夕闇にはのかに浮ぶ夕顔の花にも似た「さく」の美しさは糸製造の見学に弟子を連れて来た長唄宗家桐屋紋左エ門を妖しく魅惑し「さく」は京都の桐屋邸に内弟子に住込み不幸紋左エ門に弄ばれ、彼の女性関係の複雑さのためつけられ遂に家出、西山に帰り着くが黒い影を引く女のさかの悲しい宿命に泣く「さく」は宇吉に語れぬ負ひ目の為にかつて宇吉と楽しく語つた桑畑の小屋に縊死体となり、宇吉に発見され宇吉亦彼女と共に人知れず余呉の湖底に沈みゆくといふのである。

水上勉は「フライパンの歌」を発表後筆を折り沈黙十年「霧と影」により社会派推理小説作家として花らしく蘇り「海の牙」「火の笛」と社会小説に新風を吹き込むが「社会派といわれることにある空しさを感じ」「雁の寺」を発表し、その空しさを埋めるはじめての仕事とし次第に作風を変へ人生的詩情の目立つ哀憐小説を書き作品の背景に郷里若狭の憂鬱な厳しい自然を織り込みその暗い生活の中にひそむ無垢な女人の魂を、作者自身の貧しい家に幼くより生きることの重みをいやといふ程味はひ成長した半生の回想と二重写しにし描き、運命の如何に哀しく厳しさを語るのである。「雁の寺」の親子雁の図、「綿毛の羽毛につつまれて啼く子雁に餌をふくませている美しい絵」であつた母親雁の絵は無惨にもむしりとられてゐる。「孤峯庵は雁の寺や洛西に名所が一つふえるやろ」といふ岸本南嶽描く雁の絵の襖である。「よく内陣に入るたびにこの襖絵の一点をみつめていた」慈念の痛切に求めてやまず、しかも得ることの出来ぬもの慈念の心に秘めた希求の痛ましさ、南嶽死に慈海殺され里子去り慈念亦行方をくらまして母親雁のむしりとられた襖絵と共に強く読者の心を打つ。水上の新出発点たる「雁の寺」に永遠に慈母を求めて得られず美しき母親雁の絵に却つて哀愁一入なるものあるを着目しておきたい。水上は「五番町夕霧楼」を書き大方の喝采を浴びるが、吉田健一が「水上上氏の『五番町

町夕霧楼』は物語の域に達した現代小説」と云ひ「我々はこの一群の人物がお伽噺のに似ているから心を動かされるのでなしに、我々の心を掴んで放さないこの小説の人物達が我々にお伽噺の世界を思わせるのである。その中の女達が川に洗濯に行く代りに男に体を売るといふのは単に仕事の種類の違いである。」と規定した事は注目すべきである。「ずいぶん辺鄙」な与謝の木樵の娘母親の療養費の為夕霧楼の娼妓に來た夕子と暗い翳を負つて生れ不具といふ負ひ目を持ち鳳閣に苦難の雲水生活を送る正順、二人の共感・同情・純愛はしみじみと哀しく美しく周囲の閉鎖世界の人夫々の庶民らしい親しみと愛情の中に浮き彫りにされ、酷いエゴ、狡猾と冷酷齷く世界と切り離されて遠く物語の世界非現実の美の世界を構成する。描く所如何に救ひ難く暗くとも読者の心にはのほのと暖かき灯を点ずる。が醜く酷い現実の土壤の上に妖しく咲く美の象徴なる鳳閣に正順が対決し之を焼亡消滅さすことによりこの非現実の美の世界も自ら消え去らねばならぬ。「物語」によりまざまざと描き出された正夢・非現実の美は醜い現実の魔力により儚なく破滅し夢は醒めなければならぬ。後に残るものは哀愁である。「真徳院の火」も同様の構想なのは「五番町夕霧楼」の副産物と云はれることでも明かである。

物語的構成竹取的構想、端的に云へば余呉の湖に描く近江風土記の構想、天上のもの天人しばし地上に舞ひ降りこの世ならぬ美と幸福の境地を作り出すが、天上のものはあくまでも地上のものでなくやがて離別昇天してしまはねばならず夢はさめぬ幻は消へ後には地上のものと思慕と哀愁が残るといふ構想之である。前述の「湖の琴」の構想も勿論之である。作中しばしば原文引用といふ形式で「湖北風土記」の余呉湖の天女説話つまり羽衣説話「桐畑太夫と天女のこと」といふ伝説を記録した部分が引用される。「この土地の小学に通つた者ならば誰もがこの伝説を先生から教えてもらはず」と「さく」に喜太夫は話

して聞かせる。「菅原道真が天女の子だとするこの伝説は私（作者）ならずとも信ずる人も少ないのであるが」といひつつ、「夕暮れ道を賤ヶ岳のふもとをさして百瀬喜太夫が若狭の海辺と山奥の村からきた「宇吉」「さく」の二人をつれて岸づたいに小さくなつていく姿は心なし伝説の主人公である桐畑太夫が二児をつれて歩いてゆく姿に似ていたかもしれない。」と作中作者がいつか「湖の琴」の構想既に分明でねばならない。」と作中作者がいつか「湖の琴」の構想既に分明である。羽衣伝説・竹取物語であり描く美は非現実の美物語るは夢幻世界である。如何にそれが人ぐさく現実の衣を纏はうとも内実は現世では近より難くいづれば天空の彼方に去り行き後には哀れが漂ふのみである。実は「湖の琴」の構想を「鴉の穴」が最も単純な形でとる。「湖の琴」の宇吉が生れ育つた若狭の常神から北わずか十二戸のランブ生活の部落の物語である。この辺鄙の別天地に尺八づくりの名人芸に丹精を凝らす笹右衛門と京から流れ來て恋女房となつたお咲の幸福な生活が尺八界の第一人者小野竹風の突然の訪問によつて儚く消え去る。お咲は殺され笹右衛門は南海に沈む。この点全く「湖の琴」の発想とも重なり合ふ。妾想と嫉妬に夫が最愛の妻を殺すのは「越後ついでし親不知」に重なる。絶壁の鴉の穴に捨てられたお咲の死体に鴉群が「鴉の穴」の結末が悲惨過ぎる如く親不知の結末も孤児「おしん」が墓の中で死んだまま嬰兒を産んでいて鬼氣迫る凄惨さがある。折角手にし得た美しい女の献身と愛情の暖かさは理不尽な外界の力により哀しく消え去つて行くのである。厳しく暗く貧しい北陸の自然の中で得られたささやかな美しさ温かさ、それがささやかであつただけに消え去つた後のわびしさ哀しさは又一入である。これ亦「竹取」「羽衣」であらうか。さて「鴉の穴」は娼婦生活を経験した美しい妻と尺八造りに励む男といふ点、女の愛情により励む男の名人芸の作品いはば愛と美の結晶が京より悲劇の使徒を呼び寄せる点、多くの男を知つた女

の生理のかなしきそれにより悲劇的結末が到来する点「越前竹人形」の構想とも重なり「湖の琴」と響き合ふ。避けがたき離別哀別をもたらず天上の使者が思ひもかけぬ遠くより来る点「竹取」と響き合ふ。

「越前竹人形」は谷崎潤一郎が「越前竹人形」を読む」といふ文を毎日新聞に載せ「なにか古典を読んだような後味がのこる」としたが、愛欲に身をよきながら夫の純愛に随はうとする妻の哀しい物語は一種の古典的構図をもつ抒情世界を展開してゐるのは勿論だがこゝは特に「古典を読んだような後味がのこる」に注意したい。「越前竹人形」の舞台は日本海へ断崖となり切立つ南条山脈のふところ十七戸の辺鄙な竹細工の村竹神である。家々は区劃整然と繁茂した藪にかこまれひっそりと隠れて見える。母親無き子として育ち背が低く村人から馬鹿にされる喜助とまこと突然のぞかせた紅い襦袢の襟に都会の匂ひを見せて現はれた父の女玉枝との愛情の物語である。この構図は正に竹取物語の現代版竹藪の中に忽然と光り耀いたかぐや姫である。「飄然と荷物をもって入りこんできた」「お母んにそっくり」な玉枝により喜助玉枝には勿論十六戸の家にも明るく幸福なほりのある豊かな日々がおとずれ、一流の竹細工村に発展する。これはどう見ても竹取の翁のもとにやつて来たかぐや姫である。晴れた日朝早く北の空に雪のつもつた白山が見えてまこと象徴的ですからある。玉枝に対す喜助の情それに応へる玉枝の愛、これにより喜助の竹人形への精進は結晶し翁の精巧美麗比類なき傑作を産むに至る。この為京の平壺堂の鮫島が竹神に喜助を訪れて玉枝を見ることになるがその場面は注目せねばならない。

鮫の速くに眼をやっていた鮫島の眼に不意にとび込んできた人影があった。鮫島はどきりとした。黒っぽい着物にもんべをはいた白い顔の女だったからである。女は鮫の中を掃いていたらしかった。箒をもって近づいてくると、紅襪をはずして、鮫島に向つて腰を落し鄭重に頭を下げた。

ゆつくりと玉枝の顔に目をやった。瞬間息をのんだ。美貌だったからだ。……白い肌が、青みどりの竹の林を背景にして、ぬけ出てきたようにみえる。それに切長の心もちり上つた眼は、妖しい光をたたえて鮫島をみつめていた。

「この男に、こんな美しい妻がいたのか……」鮫島はわれを忘れてみとれた。

櫛の歯のように生えている竹林にさし込んである陽は昔のはえた地面に、雨のようにそそぐかにみえた。玉枝は黄金色の光の糸を背にして、竹の精のように佇んでいた。氏家喜助があのような精巧な竹人形をつくつた原想はここにあったのかと鮫島は思った。

眼に妖しい光を湛へ竹の精のやうに佇み精巧な竹人形の原想をなす玉枝の姿に竹取物語のかぐや姫の倅を見るは無理であらうか。鮫島の来訪は「兼徳」の番頭崎山来訪の因となりこのささやかな「竹取」の幸福は悲惨に消え去る。

人形師氏家喜助は妻玉枝の死後、竹人形の製作をふつりと断ち切つたといわれた。白痴男となつて、余生を送つたともつたえられているが喜助は玉枝の死後三年目に死亡している。縊死であつた。自殺の動機は詳らかではないけれど、孤独と狂乱の果てであつたと竹神部落の人びとはつたえるだけで、真相は今日になつてもわからない。

これが結末である。この構想は「湖の琴」特に「鴉の穴」と重なる。「湖の琴」がさうである様に京の者がただよはすものを除けばこの物語の舞台と兵衛はじめ竹神の人々の素朴で温かい人情、芦原の女の善意にみちた応待すべて涙ぐましく温いものにあふれてゐる。特に玉枝が息をひきとる時口の中でかすかな声をたて「京……宇治……」と印象的に描かれる宇治の老船頭の親切である。親元も身よりもない玉枝が極度に哀れであるが故に一層きはだつ。ぬめるやうに舟底にへばりついた血痕を薬束をしばりつけた竹でこすりながら眼をしばたいて微笑をくずさない老船頭には玉枝ならずとも舟板に手をつき頭を垂れ

て、「御恩は生涯忘れしまへん」と云ひたくなるであらう。あまりにも温かく美しい物語の世界である。薬師岳のお花畑、暴風雨の為山中深くとり残された一軒屋がここにもある様に思はれる。周囲は温かく玉枝は妖しく美しく喜助の思慕の情は激しく結晶して類稀な越前竹人形となる。正に非現実の美が克明に描かれるといつて過言でない。さて又心に残るは喜左衛門・喜助父子が竹細工に精魂傾ける熱情である。厳しく鬼気迫るもの、竹細工に生き竹細工に斃れるのである。川端康成の「名人」を思はずにはゐられまい。特に喜左衛門の最期を述べ「鴉のようにやせ細った小柄な軀は綿のはみ出た蒲団の上で小さくみえ」とは「名人」の最期を述べる叙述と重なるではないか、まこと喜助親子の体軀は異常に矮少であり、この体軀にも不拘職人としての自覚に燃え仕事に精魂打込む所「名人」なのである。ともあれこの作品に対し磯田光一が

昔日の面影を失ったのは越前の竹藪だけではない。竹人形がどれほど現在の観光資源になろうと、水上氏の心に宿る「竹人形の夢」がふたたび現実にもどってこようはずはないのである。現在の竹人形は、作者のいうとおり「この物語に出てくる竹神部落と何ら関係はない」のである。「竹人形」の背後の水上氏が見つめていたもの、それは氏の「失はれた故郷」であり、同時に「失はれた日本」でもあったはずである。おそらくこの小説には「過去の喪失」という名の「言ひ難き秘密」が隠されている。そして水上氏は、その悲しみを代償としてのみこの美しい物語を書くことができたのである。

といふは着目せねばならぬ。ちなみに「奥能登の塗師」、奥能登の辺鄙な寒村の炭焼きの美貌の娘が奉公先の輪島漆器製造販売元で辺鄙な漁村に育つ貧しい職人の境遇に同感同情しやがて互に愛し現在と将来のまことささやかな幸福、それは純にして人の心をうつ美しさがあるを得るが、京よりやって来た僧春応に見出されることにより一切の幸福と美は消滅し去り能登の二人は那智滝に情死して果てる。この構想も「湖の琴」「越前竹人形」と同巧異曲である。

敵<sup>註一</sup>しい自然に耐えて貧しく辛い閉ざされた日々を送っている人々そのかなくも険しく暗い人々の心、これらは作者の精神の深部に固着してしまった原風景であろうか。この原風景を繰り返して描くことが作者に負はされた宿命と言つてよい。そうしてこの原風景は作者に尽きることのない文学的イメージを喚起させる。……どんな風景を見てもどんな人と接しても、またどんな事件に出会つても、その奥に故郷の原風景が二重写しのように浮かんで来るのだ。ということは作者の精神構造が、イメージの基本的要素が、風土そのものであり、それを除いては成立し得ないということである。

と奥野健男がする如く北陸の寒村そのものがモチーフ北陸の風土が主人公、要するに北陸の自然・風土・人間がこれらの作品の総てであると水上文学の内容を決めることも出来やう、それにしても前述した所で明かな如くその構想の物語性は如何にしても消えない。本性は物語といふべきか。吉田健一が「五番町夕霧楼」について

彼<sup>註二</sup>が寺を焼くというこの事件自体がその性質からして物語の世界或いは物語というものが広く行なわれていた時代の領分に属し、このありさうにもない出来事が少なくともこの小説では現実に取り得るものになつてゐる。一口に言へば、これは異常なことであつて、既にさうである以上、その動機や状況を幾ら詮索してみても、その印象が強くなるばかりであり、我々は生命と云うものが樫田の場合のように強引に堰き止められれば、それが如何に奇怪な形を取つて突破口を求めることになるか解らないことに思い当る。ここに我々にとつて物語の世界ではお馴染みのものの怪や生霊の出現を見ると考え

てはならないだろうか……  
我々はこの一群の人物がお伽噺のに似ているから心を動かされるのではないに、我々の心を掴んで放さないこの小説の人物達が我々にお伽噺の世界を思わせるのである。

昔<sup>註三</sup>は物語というものがあつた……写実的な方法で描かれていなくても、聴衆或は読者の想像力は自由にその周囲に働き、詮索するという種類のことを忘れるまでにそこに直接に生命というものの姿を認めたということも忘れてはならない。又それ故にそれは美しく感じられもした。併し生命の姿を描い

てその美しさに表現を与えるというのは小説の場合でも、その終局の目的である筈である。事実変ったのは描写の方法、ただであって、物語を求めめる人間に物語を与える仕事を小説が引き継ぎ、小説がそれを果した時に我々はそこに一編の物語を見る思いをする。水上氏の「五番町夕霧楼」は物語の域に達した現代小説の一つである。

といふのは傾聴すべきである。水上文学は「物語の域に達した現代小説」、「言葉によって流動する生命に表現を与え」てゐるのである。流動する生命の根源は渡岸寺の心もち腰をくねらした観音像（湖の琴）であり、その原型でいへば

<sup>註一五</sup>私の生れた村の山裾に荒廢した観音堂、一体の如意輪観音像がまつられて  
いる。今日遠くに暮していると、あの顔が美しくあざやかに見えるのだらうか、不思議でならない。わが母に対する私の憧憬もこの観音に対する気持ちと似ている。私は九歳で別れた母のことを忘れたことはない。母を思うたびに、母と別れて生きなければならなかった自分の半生に、いつも木枯らしが吹いていたと思う。つまり母と離れて、私は母を求めて生きてきたのである。人間は生まれると母にはぐくまれて育つ。そうして、ある時期がくると、その母から離れて独立してゆかねばならない。木枯しはその意味では、誰の軀にもふきつけるわけだが、その人生が寒ければ寒いほどに、母への憧憬回帰は激しいのではないだろうか。母を憶うにつけて、私は貧しさのありがたさと美しさを見いだしてきた。苦しいことがあっても死にたいようなことがあっても、いつも、若狭の貧しい母を思つて勇氣づけられて生きてきた。ながいあいだ抱いてきた母の像は、足裏半分のコング草履をはいて、田を這いまわる姿である。その母を私は神のように尊んで今日まで生きてきた。

と水上自身が語る如く、その別離して暮す母への痛切な思慕の情である。「越前竹人形」の玉枝の臨終に「お母ん」といふ喜助の慟哭が「寝所の暗い天井に錐のようにつきささる」とあるのは水上文学の物語性の根源を端的に云ひ得てゐる。別離した己の本源に対する痛切な

思慕の情——失はれゆく日本の美しさに対する愛惜の情に昇化し「桜守」に結晶する——やがて夢の中に美しく之を再現構築する。別離がいたましく現状がみじめであればある程その夢は美しく温かいであらう、そこに構築される非現実の美は生き生きと生命の流れを表現し得るであらう。しかしそれが如何に生き生きと此の世の姿をとるとも清純なものから妖艶なものに変化しようとも「竹取」が「高野聖」になつても夢は依然として夢なるからにはやがて醒める時は来る。醒めて残るものは哀れであらう。人間に別離があるかぎり人生に木枯が吹くかぎり夢は必然であり非現実の美は描かれ続けられねばならぬ。そこにこそ生命の流れは現はれ出るのであり、これこそ「人間の文学」の本源につながるものであるとも云へる。

### (三)

昭和十二年「禽獣」を書き「雪国」の時代に入つてゐた川端康成は「竹取物語」を現代語訳し解説において昇天しなければならなかつたかぐや姫の苦悩を次の如く解説してゐる。

<sup>註一六</sup>竹取物語には求愛はある。が、恋愛は遂に一つもない。いや恋愛はおろか、本当の意味において、人間の心と心とがびつたり合う、そういう親愛と交渉は一つもない——中略——かぐや姫は、勿論この世に失望した人の昇天である。——中略——かぐや姫は、彼女の周囲のすべての人間を一蹴した。勿論それは、彼女の高い清純さのためであらう。が如何に高い清純さのためとは云へ、やはり現実を軽蔑した者の淋しさは受けなければならぬのである。といふものであるがこれに対して川端氏は

<sup>註一七</sup>川端氏のかぐや姫昇天に関する解説は、むろん氏独自のものである。「高い清純さ」を保持するために人間世界では遂に恋愛さえもできなかったかぐや姫に、氏が下した「現実を軽蔑した者の淋しさは受けなければならぬ」という厳しい裁断の言葉は、当然氏みずからにも向けられていたのである。川端氏は、この世における「人間の心と心とがびつたり合う」「親愛と交渉」

には、とうに失望してはたはずである。しかし、純粹なものを希求する心だけは、忘れることができなかった。少年少女の文章に、かすかなつながりを求めた氏は、完全にはこの世を捨てきれなかったのである。みずからのために従って現実を軽蔑したかぐや姫の淋しさは、とりもなおさず、川端氏の淋しさであった。かぐや姫のように帰るべき月を持たない川端氏は純粹なものを糧として、この世に生きながらえなければならぬ。「雪国」は、そんな川端氏が、みずから構築した純粹の世界であったようだ。

といひ、この解説にはしくもあらはれた川端の現実に対する「失望」・「純粹なものを希求する心」が「雪国」の非現実の美を構成するのである。そこで川端は作中「非現実」といふ語を繰返し使用して「雪国」が現実から抽象した仮構の世界なることを読者に忘れさせないよう周到な注意をはらふと指摘し、川端自身「空想と見えるところも案内写生がもとになってゐる」と述べる如く丹念な写生にもとづく自然描写も実は自然そのものの克明な客観描写でなく「蔽しい」「虚しい」「冴え静まる」「寂しい」といつた観念的な語彙に飾られた、作者の主観を強く前面に押し出し作者独自の心情の色に染めあげられた自然の姿で非現実の物語を展開するにふさはしい、墨絵のやうに静謐な象徴化された自然であるといふ。又「雪国」は、島村が交情の感觸を忘れかね再び彼女を訪れる車中の描写にはじまる。島村は娘（葉子）が病人を親切に介抱してゐる姿が汽車の窓ガラスに写り、その娘の顔に窓の外を流れる風景の野山のともし火が重なつて写り輝くのを見て胸ふるはせる有名な「夕景色の鏡」の場面である。ここに描き出される光景はまさにひとつの人工の美の極致である。島村は「夢のからくりを眺めてゐるやうな思ひ」で「夕景色の鏡」に写る「この世ならぬ象徴」のあえかな美の世界に酔ひしれるのである。彼が「夕景色の鏡」で葉子を長い間盗み見しながら彼女に悪いとも思はずにいられたのは、「夕景色の鏡」の非現実な力にとらへられてゐたためであつ

た。この「非現実」の「夕景色の鏡」が、「雪国」の世界の象徴であることは言ふまでもない。といふのであるが、これは妥当な論と注目すべきである。又

註八  
「非現実」の世界とは何か。この作品に即して言えば鏡に写った世界である。現実にあらざる世界ではあるが、現実から遠い荒唐無稽の架空の世界ではない。現実に近い現実でない世界、現実と架空の微妙なあわいに浮かぶ世界なのである。これはまた、作家の追及してやまぬ仮構の世界でもあろう。そして夢、神靈現象、放心状態、幻覚、幻聴、鏡の中の世界、川端氏が好んで用いるこれらの現象は、通常の言語感覚で言えば「非現実」の二面的具象なのだ。川端文学に即して言へばまさしく現実なのである。

といふのも注目してよい。ともあれ「雪国」は「非現実の世界」「非現実の美」を描いてゐることは明白である。又川端が好んで用ゐる夢をとりあげてゐることに注意すべきである。川端の作品には夢を重要な題材として扱ふもの、又さうでなくとも夢が作中しばしばあらはれ重要なはたらきを果してゐる場合も多いことは周知の通りである。例へば幻聴を題名とし、作品の基調ともする「山の音」にもこの夢の果たす役割は大きい。「尖り気味の垂れ乳をさはってゐた。乳房は柔いままだった。張って来ないのは、女が信吾の手に答へる気もないのだ。なんだつまらない云々」といふ夢、この「なんだ、つまらない」といふ鴉外の死ぬ時の言葉を含む夢は、信吾の醒めてからの反省と相俟つてこの作品全体の基調を示してゐるのは川島もいふ通りである。川端の作品の夢は重要な意義を持つことは間違なく非現実の美を構築することと不可分の関係にあるといへる。純粹なものへの希求のはげしさ非現実の美の構築をして夢、物語をここにも見ようとするは誤であらうか。夢といへば川端自身「うつつないありさまで書いた」といふ作品「古都」がある。作者のあとがきに、

註九  
私は毎日「古都」を書き出す前にも、書いてあるあいだにも眠り薬を用い

た。眠り葉に酔って、うつつないありきまで書いた。眠り葉が書かせたようなものであつたらうか。「古都」を「私の異常な所産と」と言うわけである。

とあり明かな如く夢うつつて書いたが「後でおかしいところ、辻褃の合わぬようなところを直したが、行文のみだれ調子の狂いがかえってこの作品の特色となつて」ゐると思へるものはそのまま残したといふから「異常な作品」といつても川端の作品として通じないものではない。題材も「片腕」や「眠れる美女」の如く異常ではない。むしろ川端の目に京の風物が濾過されより美しく再現し、日本古来の美の継承を志す川端の創作意識が露はに出てゐると云へる。「虹いくたび」「日も月も」「美しさと哀しみと」等の作品とこの点では近似する。「古都」の女主人公千重子は「真直ぐに、きれいに立って」ゐる娘である。それは北山杉と「おんなじ」なのであるし、双生児の妹苗子は北山杉の村に働く娘である。北山杉の村が舞台として情景が描写説明されること四回に及ぶ。姉妹の邂逅は北山杉の村。姉妹はじめて手を取り語り、雷鳴轟く嵐に苗子の千重子を庇ふ劇的場面は北山杉の中、千重子が苗子に贈る北山杉の図案の帯は秀男によつて北山杉の村の川原で苗子に手渡される。苗子が秀男に結婚を申込み千重子に話すのも北山杉の中である。北山杉は四季それぞれに描かれいづれも物語の頂点であり重要な舞台である。いふなれば北山杉はこの小説の象徴である。この北山杉の中で苗子が千重子に妙な「幻の論」を語るが川端文学初期の「ちよ」の幻と合せ考へれば川端文学の底を流れるものの一端に触れることにならうか。ともあれ「古都」は

「幻。幻つて苗子さんは、ようお言ひやすな」

「幻……………」

で終末に近づきまほのぼのあけの京、粉雪降る街苗子は振り返りもせず消え去り幕を閉ぢる。千重子も苗子も北山杉、小説の情調も北山杉で

あらう、だからこそ「古都」の終章の見出しにちなみ、作中にある北山杉を描いて下さった」東山魁夷氏の「冬の花」（北山杉）を「私（川端）は東山氏のゆるしもなく巻頭のかざりとさせてもらうのである。「異常な所産『古都』の救いとしての心もあつて」となる。かくては千重子の北山杉の夢は特に注目せねばならぬ。北山杉の章、高雄の楓の若葉見物に真砂子と千重子が出かけ、楓の新緑に埋る清滝川を廻り苗子に邂逅する、その夜のことである。

「お母さん千重子はほんまはどこで生れたんどす」母は父と顔を見合はせた。

「祇園さんの桜の花の下でや」と太吉郎はきっぱり言った。祇園さんの夜桜の下で生まれたなんて「竹取物語」のかぐや姫が、竹のふしとふしとのあいだに、はいつていたという、おとぎ話と似たものではないか。

花の下で生まれたのなら、かぐや姫のように、月から迎えがくだって来るとかもしれない、千重子は軽いじょうだんを思いついたが口には出さなかつた。

口には出せなかつた竹取物語の冗談を思いついた夜、千重子は夢みる。北山杉を。

はじめは、夢というより、うつつとのあいだで、むしろ楽しく、真砂子と今日、北山杉の村へ行つたことを思い出していたのだ。真砂子が千重子に似ていると言つた娘も、あの村でよりも、ふしぎに考えられ出して来るのだ。

そして夢の終わりに青いなかを落ちていった。その青も心に残る杉山なのかもしれない。

といふもの。杉の村の杉職人の双生児の一人として産まれた千重子の潜在意識・幼児の心に残る杉山、青いなかを落ちゆくは父親が、捨てた子に心残り杉枝を飛びそこね墜死する響であらう。

千重子は竹取のかぐや姫の如く実の父母を知らず突如異常な状態で太吉郎の門先に現れる。子なき太吉郎夫婦には正にかぐや姫の発見で



あり、幸と生き甲斐をもたらしたものであった。「古都」も物語である。しかし今や、千重子の出生否出現の真実を養父母はあくまで秘して語らぬにも不拘、千重子自身既に北山杉の象徴なるかの如く、杉に魅入られ引かれ果は杉の夢を見る。この夢こそ千重子出生の真実と産みの親——もはやこの世にない——を知らせるものである。双生児はやがて邂逅し、別離の悲哀をかみしめねばならぬ。「古都」の「物語」は完結する。「古都」は北山杉の精双生児姉妹の物語である。だからこそ千重子の北山杉の夢が重要な伏線として物語の全面に根を張ることになる。

#### (四)

川端の「古都」が京の情趣を外から描く妙なる物語ならば、水上勉には京の人情を内から描いて巧な物語「北野踊り」がある。「古都」にも描かれる北野踊りの上七軒「蔭村」の芸妓勝千代は北山丸太の老舗の息子に身請けされ子を生み半月、男に戦死され生活に困り、男の両親に泣きつくが相手にされない。戦時中上七軒は一軒も営業してゐないから苦しい生活をつづける。やがて終戦、営業再開の「蔭村」から再び座敷へ出たいが乳呑子を抱へどうにもならない。思案の末蔭村の主人勝三にも秘密で西方寺の智道尼に養女に貰ってもらう。娘は夜毎寺へ通う勝千代の乳で成人しゆくが母親が勝千代であることは庵主の他、一切、娘自身さへ知らぬ。やがて娘は「こんどこそは、きれいな尼さんが出けるわ」と芸妓に目頭をうるませるほど美しく心やさしき智仙に成長し、勝千代は「戻り橋一の鬼女を演じて凄艶鬼気あふれると強力紙が絶讃「北野踊り」の主演を演じるやうになる。この踊りに智道尼は目鼻だち美しく勝千代の面影ある智仙をいつもつれて行く、が勝千代が母とは気づかず大勢の芸妓の中で、とくに親切で智道尼にかくれ北野や市内外をつれ歩き、誰よりも足しげく寺へ来て笑み

かてくれる美しい人と思ふにすぎない。三十四年春の踊りがすみ間なく勝千代は咯血、本人たつての望みで西方寺本堂の屋根が見られる小さな小笹病院に移り、臨終の床に智仙を呼び、智仙の得度式の費用と自分とお父ちゃん(定吉)の供養料として二十三万円の貯金通帳を庵主に渡し智仙の手を握つたままことされる。母と名のることなく。勝千代に親許はなかつた。ここまで智仙をとりまく、人の世の哀しさあたたかさ、有難さ、人情のこまやかさ美しさをしみじみと描ききつたこの物語の頂点はくるのである。「ほんまの母子やないか」といふ西方寺尼講の噂話に得度式せまる智仙の心の動揺を心配し

註三「智仙ちゃんあんな……死なはつた勝千代はんのことなどない思うてはる」

と智道尼がたずね、智仙は答へる

註四「お母ちゃんやと思うてました」

「うちは、知つてましたんです。あの人がお母ちゃんやいうことは知つてましたんです。お師匠さん。うちは、いまでも目エをつぶると、灰いろの高い長い木イが空をつきぬけるやうにしてそびえている景色がうかびますのんです。小っちゃい時に、お母さんに抱かれて見にいった景色のように思うのんです。先生につれられて周山の北山杉を見にいったことがあります。北山杉は何本もの灰いろの肌をみせて空へつきぬけてました。この景色やつたんや智仙はそない思いました。うちはきつとこの杉をお母ちゃんと見にきたことがあるのやろ、それにちがいない、そない思うやうになつたんです。それでいつかの日お座敷から帰つてきやはる勝千代お姉ちゃんと会つたとき今出川の甘味屋へ尾いていったんです。その時智仙はふと、北山杉のことを思いだしてお姉ちゃんにたずねてみたんです。北山杉はお姉ちゃんもみたことがある。きれいな杉林やつたアお姉ちゃんもあの林をみるのが好きやつた。いわはつたんです。そうしてお姉ちゃんが横を向いて泣いてはんのをみたんですねや。杉林をみにつれていってくれはつた人はお姉ちゃんやないかしらん、そない思うたんですが。そしたらこの人はあたしのお母ちゃんやないか、そんな気がしたんです。お姉ちゃんは、泣いてはつただけです。その目は死な

はる時に、小笹はんであたしの手エをにぎらはった時とおんなじ目エどした。その目は二へんしか見てエしまへん。」

「お師匠さん。どうぞ嘘をつかんとて下さい。お師匠さんは、赤ン坊のあたしをどこからひろうてきやはったんどす。それだけ教えて下さい。智仙はいつでも尼さんになります。」

智道尼は絶句した。しかしやがて静に言ふ。

「あなたのみた北山杉は、お姉ちゃんに抱かれてみたのやろ。きつとそうやろ。お姉ちゃんがな、こんな子を拾うてきた庵主さん、かわいそうやさいお寺さんの子オにしてあげて下さい、そないいうてあなたがまだ赤ちゃんの時つれてきやはったんや」智道尼の目に大粒の涙がいく粒もやどった。

「お姉ちゃんは死んでしまはった。本当のことを知ってはるお姉ちゃんは仏さんになってしまはった。あなたがあの人をお母ちゃんと思うのやったらそれでよい。わたしも、生きているかぎり、あの人をあなたのお母ちゃんやと思うて末長う弔うてあげます。」

智仙は畳につつ伏して泣きくずれたが智道尼はあくまで真実を告げなかつたのである。

以上長きをいとはず抜き書きした所で明かな如く遂に智仙は母を知らされぬ。智仙は母を希求して、楽しみの一時は母とも知らず、母を得んとして美しき母は永遠に消え去るのであり、後に残るは読者の胸を吹きぬける哀愁のみである。ともあれ「北野踊り」の頂点を形成するこの離別哀愁は智仙の北山杉の夢、意識の底に潜む幼時の望見である。「古都」に伏流となり諸所に表出し重要な基調をなすものは千重子の北山杉の夢である。これは千重子が生まれて間なしの父の生涯を語るものである。いづれにしてもこの北山杉の夢は哀愁漂ふものであるが「古都」「北野踊り」二つながら北山杉の夢のもつ意味は大きくまた酷似してゐる。「北野踊り」の北山杉が「古都」のそのの影響を受けたとは今にはかに断じ難い。勿論「北野踊り」の方が後出である。ともあれ苗子は粉雪降る古都の街の彼方に消えて行き、智仙尼は

毎年の北野踊りについて見うけたことはないのである。一は双生児の妹を通して一はお姉ちゃんを通して生みの母への希求は激しいものであった。千重子も智仙も己の生れを知らず之を養母にたずねて得ずまこと哀切である。それだけに、親許のない勝千代と智仙、幼にして両親ともになく養家につくしまれる千重子と苗子、の間にみる夢、非現実の美は鮮かに美しかった。がやがては醒めなければならず、醒めては親なき者には哀愁が残るのは当然であらう。いや「古都」「北野踊り」二つとも北山杉の「物語」であつたのである。

ちなみに川端康成が幼少にして父母をはじめ血縁の多くを失ひ、水上勉九才京の寺に放たれて現実の孤児にひとしかつたことは周知の通りである。

註一 文学史 説本

二七頁

註二 五番町夕霧楼

(新潮文庫)

二〇二頁

註三 五番町夕霧楼

(新潮文庫)

二〇四頁

註四 越後ついでし親不知

(角川文庫)

二六七頁

註五 湖の琴

(角川文庫)

三八頁

註六 湖の琴

(角川文庫)

三八頁

註七 越前竹人形

(新潮文庫)

一九〇頁

註八 越前竹人形

(新潮文庫)

二七五頁

註九 越前竹人形

(新潮文庫)

二八一頁

註一〇 越後ついでし親不知

(角川文庫)

二六二頁

註一一 越後ついでし親不知

(角川文庫)

二六三頁

註一二 五番町夕霧楼

(新潮文庫)

二〇四頁

註一三 五番町夕霧楼

(新潮文庫)

二〇三頁

註一四 五番町夕霧楼

(新潮文庫)

二〇一頁

註一五 私の幸福論

(新潮文庫)

九〇頁

註一六 川端康成の世界

(新潮文庫)

一九八頁

註一七	川端康成の世界	一九八頁
註一八	川端康成の世界	二一五頁
註一九	古 都	二三四頁
註二〇	古 都	二三一頁
註二一	古 都	九〇頁
註二二	古 都	九四頁
註二三	北野踊り	二六四頁

(新潮文庫)  
(新潮文庫)  
(新潮文庫)  
(新潮文庫)  
(新潮文庫)  
(角川文庫)